

論と相違する點であつて本書の第二の特徴ともいふことが出来る。かくの如きは確に日本神話に親炙すること永く、また日本歴史に對する深い洞察を有する著者の如きにしてはじめてよくするところであると思ふ。

叙述極めて平明にして、行文些の澁滞なく、一氣に全編を讀了することが出来る。獨り専門歴史家のみならず博く一般國民の教養の爲に推奨すべき近來の好著といふべきであらう。(四六版二〇〇頁、昭和十五年十二月 弘文堂發行、定價一、二〇)(柴田實)

日本上代の武器

末永雅雄 著

戦争は歴史を作る。歴史は又戦争に依つて展開される。人生の歴史から闘争が驅逐さるゝ日は永遠に來ないであらう。人類物質文化史の一部門を研究する考古學に取つて、武器の研究が重要な位置を占むるのは、蓋し當然でなければならぬ。

本書は我が上代の武器中の攻撃武器に就いて、其の資料を蒐集しこれを種々の角度から考察したものであつて、昭和九年同じ著者の世に送つた『日本上代の甲冑』の姉妹篇をなし我が上代武器に關する攻防兩面よりする研究の一翼をなすものとする。さて三百十頁に渉る其の叙述は前後兩篇に分たれて前篇は主として武器そのものの持つ歴史性と其の性格を概観したものであり、後篇は右の武器に就いての型態學的研究並びに之が考説を試みてゐる。い

まその内容の一斑を擧げると前篇は一、總論 二、日本上代武器の推移 三、日本上代文化と武器なる三章から成つて、總論に於いては「時代の科學と文化とは常に武器の上に顯現せられ」……「武器は人類文化開拓のための最も有力なる援助者であつた」とする武器の本質論から發して「その具有せる實際戰鬥上に現される性能の發揮にもとづきこれに對する依倚と信頼とは遂に轉じて武器に對する「信仰」といふ一形態をとつて現れ出づるに至つた」としてそれに日本武器のもつ精神的性格に觸れ、我が上代社會に於いて、武器が如何に信仰的なものであつたかの實際を文献上より交證してゐる。而して著者は又其の記述に於いて武器の發展を常に先史時代からの經過として見てゐる點が擧げられる。第二章に見ゆる考察は、最もよくそれを表はしたものと云ふ可く、日本武器の黎明を繩紋式文化期に置いて其の石器中石刀、石劍、石棒、など何れも武器としての性質をもつものであるとなし、後篇に於いて、これらの形式が古墳時代の我が國に固有と考へらるゝ頭椎大刀に傳へられたとする獨自な見解を導いてゐるのである。なほ此の第二章では考古學的遺物のうち、多少とも武器に關聯を有する遺物類はつとめて蒐集圖示の上論述してゐる。それはひとり石器、骨器、金屬器たるに止まらない。腐朽し易い木製品に對しても近時發見されし漆の弓などにも及んで、そこに資料集たるの意味をも兼ねしめてゐることが注意せられる。

こゝで著者がまた其の敘述に於いて武器の推移を他の考古學的遺物から窺ひ得る日本文化全體の特殊な流れを辿つて理解しよう

としてゐることも擧ぐ可きである。彼の銅劍等に見られる刺突器が優勢であつた我が先史時代武器が古墳時代に入ると斬撃器に推移し、片刃の刀の發達となり、奈良朝以後之が一層盛んとなりその外装にも鍛工技術の上にも隋唐文化の影響を受けた事を述べてゐるが如き所論は當否は別としてその例とせられる。次に第三章では考古學的にこれら武器が夫々如何なるものと伴出するかいはゞ武器の他の遺物に對して占むる位置を述べたもので、此處では出土遺跡の性質分布他の伴出遺物自體の解説までが記るされて詳細であるし、その態度に於いて文献から明かにされ得る所をも併せて見て上代武器の社會性を論じてゐる。例へば上代武器の製作並びに管理に關する事項、神話等に見る武器の精神的位置、一般人の信仰、氏族社會に於ける武家の武技の問題にまで及んでゐる。

後篇は主として日本上代武器中の主要武器たる刀劍類を解説したものであつて、その多くは、何づれも古墳出土品である。其の記述は刀劍自體に對する技巧な説明の他に之が化學的研究の結果をも録して居り、また外装に於いては之を年代的に古墳時代と奈良時代のものに區別し形式的には實用的なものと儀仗的なものと區別してゐる。而して是等のうち鏢頭外装に依るものを金銅外装に依る頭槌大刀等と區別した上これが紋様、形式その他からその祖型に及び、所謂鏢頭大刀が大槌様式たる從來の所説を展開して之に對する我が固有様式として鹿角裝大刀や頭槌形大刀を我が前代の遺物の中に求めてゐる事は注意すべきである、鹿角裝に於いては更にその直弧文の起源を皮革の縫合と鹿角の使用に聯關

づけ填輪盾等をも引證して論じ之等の發生を獸類の多い先史時代環境に結びつけて考へようとしたのは傾聴すべきものである。後篇には、なほこれら主要武器の他に儀禮用武器に就いても録し實物の存せぬものは文献から之を推測してある。

要するに本書は日本の武器に就いて、單に武器自體の形態學的考察のみにとゞまらず、之がもつ歴史性を考察せんとされてゐる著者の用意を窺ひ得るものがある。これは京大考古學教室にあつて永年故濱田耕作博士指導の下に致學をつまれた賈と云ふ可きであらう。刀劍を單なる刀劍として終らさずに入類物質文化史の主要なる遺物類として考察しようとしたことは本書の特色と云ふ可く、よしやその所論なほ議すべき點が萬一あるとしてもその努力は高く評價せらるべきであらう。

因みに本書は、四六倍版で圖版七十五葉に挿圖一五二葉添へられ大部分コロタイプ版の高い實測圖、寫眞等が鮮明に出てゐる。(四六倍版本文、三五四頁、昭和十六年二月、弘文堂發行。定價貳拾六圓)〔藤岡謙二郎〕

日本佛教史論

堀 一 郎 著

從來の日本佛教史の研究には、通じて一つの型とも云ふべき傾向があつたことは、動かすべからざる事實である。それは日本佛教を以て、世界宗教たる佛教の一派的存在に過ぎないとする立場